台湾からの地区通信・・・当地の自殺とアヘン中毒

薬学雑誌 1900 年(明治 33 年)　1045 頁

台湾は 1895 年日清戦争の結果，日本に編入された．かの地は砂糖だけでなく，医薬品やセルロイドの原料として期待されていた樟脳の世界的産地であり，下山順一郎はじめ多くの薬学関係者が渡り殖産興業に貢献する．地区委員に任命されたものはこうした事情や，現地の珍しい医薬風俗などを薬誌に寄稿した．

編入 5 年後の台北通信は，自殺事情を書いている．要約すると，台湾では内地のような入水，自刃，首吊り等で死亡する者まれにして，百人が百人中，阿片烟膏や阿片糞灰を吸飲する．6～7 分で致死するが，目下『製薬所』製造品は混和物があるためか，効力弱く，救命の機会が増えている．方法は以下の薬品を用いるが，いずれも吐き出させることを目的とする．1．蓮鬚，2．胆帆，3．苦参，これらは薬店で買える．面白いものは 4．金魚を生のまま擦り，油または砂糖の汁に混ぜて飲ます．5．柿渋を何椀となく飲ます．6．コア菜の青汁．これは内地の高菜に似て普段漬物にしているが，助かったあとは一生これが食べられなくなるという．

また，台湾婦人の阿片吸飲者が出産すると乳児は必ず中毒になっている．生母が阿片を吸飲していた時刻になると大人のように流涙咳喇を催し，乳を与えても飲まず，ただ泣く．母が烟筒にて阿片を焼き煙を口に含んで嬰児の口に吹き込めば満足して眠る．阿片を与える量はだんだん減らして，生後 1 週間から 10 日かけて廃止する．

この記事に続く基隆通信は，ペスト患者の発生や寄港した病院船近江丸の薬学関係者の消息などを伝えている．台湾海峡に浮かぶ日本海軍の馬公要港部の薬剤官が送る澎湖島通信には，飲み水確保の苦労，水質検査結果などが記されていた．

今のファルマシア地区通信欄とは大分違う．会員はめったなことで徒歩圏から出ることがなく，ニュースは内容，スピードからして噂話に近かった時代，この欄は貴重なものだった．

小林　力